

もに私に わが孤児 あ残留無父

私の家族
昭和20年夏
黒竜江省佳木斯。父と私達4人(母・兄・私、生後2カ月の弟)の別れは突然やって来て、一瞬のうちに引き裂かれました。父はシベリアへ抑留。私達は引き揚げ途中で弟と死別しましたが、翌年9月頃に帰国を果たしました。そして23年3月に父の正式な死亡通知を受け取ることになるのです。父は何と別れた2か月後の10月にはもう亡くなっていたことを知りました。

父の帰還を待っていた舞鶴は、一般の引揚者や、特にシベリア抑留者がナホトカを経由して上陸する港として昭和33年まで使われ、一隻の船に約3000人が乗って帰国したということです。もし父がシベリアで生き抜き、帰国する幸せが与えられていれば私達家族はこの舞鶴港で抱き合っていたことでしょう。その光景を想像し、私は一瞬、眩暈を感じる！しかしその願いは叶えられることはありませんでした。



引揚げ棧橋のあった舞鶴市平地区

写真の手に引揚げ者を受け入れる援護局があったが現在は材木工場になっている。大陸から引揚げた人たちは沖に停泊した母船から艇に乗り、右上岸壁にあった棧橋を渡り上陸した。

戦後海外から帰還した日本人は約639万人(1961年)、全国11の港が引揚げ港になった。引揚者数は佐世保(139万人)、博多(139万人)が最も多く、次いで舞鶴(66万人)であった。

休憩所、寮などが数多く建ち並び、引き揚げ港としての重要な役割を果たしたのです。お天気の日も雨の日も当時の舞鶴の方々は13年もの長い間約66万人の人びとを受け入れ、お世話し続けたことになりました。過酷な抑留生活

私は引き揚げ途中のハルビンで、迷子騒動を起こしました。2・3歳の時です。幸いにも列車の中に投げ込んでもらったおかげで、現在の私がいまいます。しかし、そうでなければ、私は「中国残留孤児」になっていたと思います。支援の輪へ

牡丹グループスタッフ 福田順子

みちのり

下平朋好さん(1932年長野県下伊那郡生まれ)

一番聞きたくないのは、日本がしたことを誤って伝えること、戦争はだめ!



自宅の居間でくつろぐ下平さん

6歳の時、長野県から父母と弟の4人で南五道尚長野村開拓団としてロシア国境に近い東安省(現黒龍江省)密山県に入植した。そこで開拓団の小学校に入学した。

13歳の時、終戦間際の8月10日頃、夜明け前に突然、大勢の開拓団の人たちが列をなして逃げた。途中、平原でソ連軍の飛行機に襲われた。隠れる場所はなく、たくさんの人が爆弾で焼かれ、機銃に撃たれて死んだ。団長が残っている人を集め、10人で、牡丹江の街まで1週間歩いていった。そこでソ連軍に囲まれて、貨物列車に乗せられ、ハルビン、長春、奉天を経由し、難民所に着いた。

奉天(瀋陽)の難民所 10月から11月だったろうか、外は雪が降っていた。沢山の人がいたが、冷たいコンクリートの床の上に、粟の茎で編んだポロポロのむしろを敷いて過ごすしかなかった。初め

は皮のままふかしたコーリヤンをもらって食べていたが、ほどなく何ももらえなくなった。両親はあまり食べずに子供に分けてくれた。水も食べ物もなく、中国で生まれた4歳の弟が死んだ。その一週間後母が死に、父も死んだ。

残った私と下の弟は、中国人が紹介して別々の養父母に連れられていった。養父母は大切に育て

てくれたので元気がなくなった。家ではいじめられなかったが、外では石を投げられたり叩かれたりした。それで学校に行かず、瀋陽で家の商売を手伝った。18歳の頃、解放軍が入ってきて、弟の消息を調べることができた。

夜間学校で中国語 23歳のころから鉄工所で働いた。そこで夜間学校に通って中国語を学んだ。中国人でないから給料は安かった。それから結婚して3人の子供を育てた。77年、45歳の時、一時帰国できた。すぐに永住

長野県から送られた開拓団の人数は義勇隊開拓団を含め33,743人¹⁾、全国から送りだされた開拓団約32万人²⁾の約10分の1に相当する。また下平朋好さんの家族が所属した南五道尚長野村開拓団では入植者は292戸1,372人、その内、死亡・未帰還者は約980人³⁾(生還者は約29%)で、残留孤児となった下平さんが証言している悲惨な状態が想像できる。

現在80歳、ここ日本語教室に来て大勢に会って、勉強する。それが一番楽しみ。最近頭に残ることがなくなった。忘れるばかり。でも、この頃日中関係が損なわれるような話を聞くと、子供の頃のことが思い出されて心配になる。(藤田順子)

中国料理「焼餅」に挑戦



学習者(藤本秀子さん、左から2人目)が先生です。

粉〇〇g、水〇〇gと焼餅の作り方を習うつもりでした。ところが今回の先生は違っていました。みんな自分量、手加減で適当に加えていく。それでいてちゃんと出来上がっていくのでした。日頃は日本語教室の学習者ですがこの日は料理の先生です。どの調理テーブルにも何人かの先生がおり、隣の料理の進行など気にもせず、この先生たちは言葉少なにどんどん進めていきます。みんな自分流です。もしもこれが日本の先生だったらさきとリィダー先生の様子に合わせるのでしょうか。心配に及ばず、どのグループでも大小、形の違う美味しい焼餅が出来上がりました。初めての料理教室は大盛況でした。学習者15人、スタッフ12人、一般6人、合計33人の参加でした。頼りがいのある料理の先生たち、次回もお願いします。(松本康子)

交流の広場

教室風景



伊東先生の講義、宝塚市、伊丹市の教室の方も含め、3回で延べ80人参加されました。

スタッフのスキルアップへ 今年度も昨年度に続いて9月から11月の第二学習週日に「日本語

教え方研修会」を実施しました。講師に大阪YWCA専任講師の伊東和子先生を迎え、ワークショップを取り入れて実施。

「相手の理解を確かめながら易しい日本語で伝える」「上手な聞き役になる」「言葉があまりわからなくてもコミュニケーションができた」等、学習者に達成感や安心感を持ってもらうことなど、ボランティアとしての基本的なスキルを学習しました。僅か3回の開催でありましたが、密度の濃い充実した研修会でした。(田村博志)

今回はバラグループを紹介します。

バラグループはスタッフを含め総勢18人の賑やかなクラスです。前半のグループ学習では日常生活の話題を材料に、フリートークを楽しんでいます。また後半は個々のニーズを考慮した個別学習で、書くことも含め、よりきめ細かい学習をしています。このグループの学習者は当教室の3つのクラスの中では最も日本語に慣れているとは言え、隣近所の人たちなどの中に入って行くのはためらいがちです。そこを一步踏み出すために、「日



元気いっぱいのバラグループの学習者とスタッフ

本語で大いに自分を表現しよう」と頑張っています。(越智徹)

主な行事

- 9月29日 料理教室
- 10月14日 デジカメ教室
- 23日 バスツアー
- 11月24日 生け花教室
- 12月15日 パッチワーク